



簡単な

# 東日本大震災の調査報告



# 津波被災地における災害文化

北海道大学大学院理学研究院  
地震火山研究観測センター  
定池祐季

# 今日のおはなし

1. 目的
2. 災害文化とは
3. 津波被災地の復興過程と災害文化～奥尻島を例に
4. 津波被災地の災害文化のこれから  
～東日本大震災の被災地について

## 今回の目的

- 自然災害の被災地（特に災害常襲地）において形成される「災害文化」を切り口に、
  - ①北海道南西沖地震（1993年）を経験した奥尻島の復興過程の紹介
  - ②東日本大震災の被災地の簡単な調査報告
- 会場のみなさんと「自然、特に海とどのように付き合っていくか」、「どのような災害文化を形成し、継承していくのが望ましいか」ということについて、意見交換

# 「災害」とは何か？

- 「破壊的な災害因(agent)が脆弱な人々と結びつくことにより起こる現象であり、生存のための社会的なニーズ、社会秩序、社会的意味を破壊する出来事」

(Oliver-Smith 1998)

# 日本における災害の社会科学研究

- アメリカ合衆国の研究動向にならう形で発展
- 1964年6月新潟地震時にアメリカ合衆国の災害研究者が来日  
→日米の研究者の交流がはじまり，発展する

# 「災害文化」

- Moore(1964)が提唱

「災害常襲地のコミュニティに見出される文化的な防衛策」  
(林春男1988:246)

「個人や組織の災害経験を定位し、防災、減災のための心的対応と適切な行動の生起を計り、組織の機能維持と適応能力の向上を可能にする」もの

(広瀬弘忠 1984:119)



災害発生後に形成され、防災や減災に役立つ  
(あるいは阻害するもの)という前提

# 災害文化の範囲

主に3つに分かれる

①特定の地域の中で

共有されている文化

②特定の人々や集団の中で

共有されている文化

③普遍性を持ち、広い範囲（地域・集団）に浸透している文化

災害下位文化

災害文化



# 津波被災地における災害文化

- 地震 = 津波という知識や，その知識に基づいた行動規範（例：高台に避難すべし）に特化
- 災害常襲地では，地域の歴史の中に災害文化の変遷を見いだすことができる。  
(例：津波記念碑，「大切なものは高台に」という言い伝えと実践など)



# 津波被災地の復興過程と災害 文化～奥尻島を例に

# 災害文化の現れ方の例

発災前

災害  
発生時

初動期

復旧期

復興期

伝承

避難行動

# 北海道奥尻島



# 北海道奥尻町



- 人口3,160人  
(2011年3月末現在)
- 主な産業は、漁業と観光業。
- 親戚同士が多い。
- プライバシーはほとんどない
- 所在不明になることが難しい

# 奥尻町の漁業



- イカ
- ウニ（主にキタムラサキウニ）
- アワビ
- さくら貝（エゾバカ貝）
- ホヤ
- カレイ, ヒラメ
- もずく

などなど

# 奥尻町の観光



- 海岸線の景色，海産物などが売り
- 70年代の離島ブームで宿泊施設が増加
- 北海道南西沖地震後に新築・新規開業する施設も。
- 2000年有珠山噴火時にはツアー客が減少
- 数年前から滞在型観光を意識した戦略に

## 奥尻島〇×クイズ①

元オリックス投手

（その後阪神コーチ→日ハム→楽天）の  
佐藤義則の出身地である





## 奥尻島〇×クイズ②

- 奥尻島固有の毒ヘビがいる

## 奥尻島〇×クイズ③

- 空からウニが降ってくることもある。

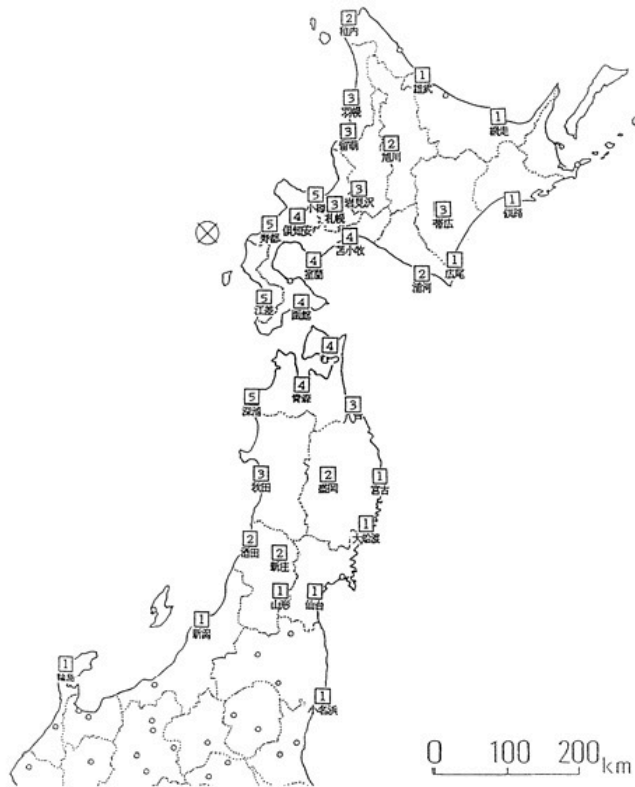


# 日本海中部地震



- 1983年5月26日発生
- マグニチュード7.7
- 最大震度 5
- 死者・行方不明者104名
- 奥尻町では2名が犠牲に
- 4.5mの防潮堤の新設・かさ上げが行われる
- 学校教育で地震避難訓練が始まる
- 地震 = 津波という知識が根付くきっかけになった

# 北海道南西沖地震の概要



発生日時：

1993年7月12日22時17分

マグニチュード：7.8

最大震度：5（寿都，江差など）

※奥尻島の推定震度は6

死者・行方不明者：230名

（うち奥尻町：198名）

重軽傷者：323名

（うち奥尻町：143名）

奥尻町の被害総額：約664億円

津波、火災、斜面崩落、  
液状化現象などが発生



# フェリー乗り場付近





# 斜面崩落



# 災害前後の比較：青苗地区



1976年  
国土地理院

1993年7月13日  
国際航業株式会社





## 奥尻島での体験

- 奥尻中学校2年生の時に北海道南西沖地震に遭う。
- 近所の人呼びかけで避難をした。
- 自宅は無事だったが、数軒隣まで浸水していた。
- 災害4日後から約1ヶ月間、「疎開」生活。
- 救援物資をいただいた。
- 報道の過熱と調査公害を目の当たりにする

# いち被災者として振り返ると

- 価値観の変化
- 「被害がなかったこと」への後ろめたさ
- 1年半後に阪神・淡路大震災
  - 大きな災害が起こったことの悲しみと
  - 「忘れられていくこと」への漠然とした不安
- 自分なりに、「あの災害」が何だったのか知りたい
  - 大学進学後、災害研究へ

## 中学3年生男子（当時）の体験談

「最初ドーンって音がして、何よって思ったらばーって縦揺れ。一回目。やべえやべえって帰ろうと思って立ったら今度は横揺れだった。ゆっさゆっさって。全然歩けなかった。ゆれてゆれて。電信柱がよく折れねえなって感じだった。で、家に帰って、帰ったらみんな起きて大騒ぎしていた。・・・兄貴は船をあげて来なくちゃって言って、その時かっこよかったさ。「おめえらもう行ってれ」って言ったさ。「だめだ、一人はだめだ」と言って。で、懐中電灯持って。で、地震来たら津波来るってすぐわかったから、怖くて海をてらしていた。でも兄貴は手元をてらせって怒るでしょ。でも手元をてらしながらたまに海の方をてらしたりして。そしたら、一瞬ね、岸壁の水がぶわって増えたの。「はっ」て見直したら「波が」ぼわーってきた。で、逃げたって感じかな。」

## 青苗地区MHさんの武勇伝

- 青苗地区に住んでいた当時17歳のMさんは、地震を感じた時に津波の来襲を予測。祖父を背負い、祖母を先に歩かせて無事に避難
- 当時は「パンツ一枚で逃げたH」と言われていたが、現在は消防士として活躍中



# 奥尻町民の避難行動

日本海中部地震の経験から、地震＝津波という知識があり、行動に結びついた

- ① 徒歩または車で屋外の高台に避難
- ② 親戚・知人宅または近くの公共施設に避難  
(身体が冷えて寒くなった、夜が明けて周りが見えるようになったなどの理由による)



参考: 余震を心配し、屋外で夜を明かす青苗地区の人々

『1993年7月12日北海道南西沖地震全記録』(北海道新聞社編 1993)

## 救援と復旧

- 国や道による対策本部の設置  
(22時30分、北海道災害対策連絡本部など)
- 自衛隊への災害派遣要請(13日0時18分)
- 災害救助法の適用 (13日0時30分)
- ライフラインの確保
- 各種救援・救護・救助活動

# 避難生活



物資は島外から運ぶのみ。  
輸送は、船（巡視船・フェリー）、  
ヘリコプターが中心。  
（親戚からの援助物資を漁船で輸  
送してもらった例もあり）

避難所生活は災害翌日～最大45日  
仮設住宅入居は二週間後から開始  
（基本的に集落ごとに建設）

左，右上：『1993年7月12日北海道南西沖地震全記録』（北海道新聞社編 1993）

右下：日本赤十字社関係者より提供

# 観光客と島民の島外への移動

観光客は巡視船などで離島（7月13日）



写真：『平成5年7月12日北海道南西沖地震記録書』  
（北海道南西沖地震記録書作成委員会 1995）

一般島民の離島は、フェリー航路が回復した3日後（7月15日）から本格化

7月15日16:00 奥尻一瀬棚臨時便

7月16日：奥尻一瀬棚便通常運行再開

奥尻一江差臨時便

7月17日：奥尻一江差便通常運行再開

奥尻一函館便（飛行機）運行再開



写真：『1993年7月12日北海道南西沖地震全記録』

（北海道新聞社編 1993）

# 奥尻町内の避難状況

避難所	避難期間	実人数（人）	延人数（人）
青苗中学校	7/13-8/15	660	8,736
青苗小学校	7/13-7/21	130	710
奥尻町青苗支所	7/13-8/2	10	148
奥尻空港	7/13-7/18	50	280
米岡自治振興会館	7/13-8/28	160	2,777
松江老人憩いの家	7/13-8/9	55	839
松江児童会館	7/13-7/14	11	16
奥尻高校	7/13-8/1	270	1,563
奥尻小学校	7/13-8/13	125	2,127
奥尻町公民館	7/13-7/21	50	290
母子健康センター	7/13-7/19	35	175,
球浦自治振興会館	7/13-7/15	50	895
宮津小学校	7/13-8/4	248	1,386
東風泊自治振興会館	7/13-7/26	25	299
東風泊保育所	7/13-8/8	75	907
レストラン波濤	7/13-7/27	30	442
野名前自治振興会館	7/13-8/10	30	777
合計	—	2,014	22,367

出典：『蘇る夢の島！北海道南西沖地震災害と復興の概要』（奥尻町 1996）



日本赤十字社関係者より提供

# 仮設住宅建設状況

(1993年8月末現在)

地区名	設置戸数	入居世帯	入居人員
勘太浜	4	4	19
稲穂	14	14	32
海栗前	8	8	28
東風泊	4	4	10
球浦	6	6	22
谷地	2	2	8
松江	24	24	59
青苗	263	263	714
米岡	5	5	7
計	330	330	899

出典：『蘇る夢の島！北海道南西沖地震災害と復興の概要』（奥尻町 1996）



日本赤十字社関係者より提供





日本赤十字社関係者より提供

## コラム：救援物資

- 「悲劇の島」の報道に，全国から義援金・救援物資が寄せられた。
- ゆうパックが無料になり，「善意」によらない物資も寄せられた。  
（未洗濯の古着，廃車など）
- 目立たないように廃棄→某紙によるリーク→バッシング



救援物資を保管するために義援金で作られた倉庫（2010年7月11日撮影）



# 奥尻町の復興過程

# 奥尻町の復興計画（行政）

- 1993（平成5年）10月1日 災害復興対策室設置
- 1994（平成6年）度を復興元年と位置づけた各種事業の実施
- 雲仙普賢岳被災地の事例を参考に義援金による見舞金の配分，復興基金の設立

基本方針	大項目	小項目（主なもの）
生活再建	住宅再建	公営住宅建設，個人住宅建設
	基幹産業の再建	水産業・農業の再建 観光の再開補助，後継者育成
	生活の安定および社会生活基盤の確保	資金の利子補助 医療保険施設，文教施設，社会福祉施設の整備
防災まちづくり	各地区のまちづくり	新しい集落の形成（集団移転など）
	避難対策	避難計画の策定 避難施設の設備
	防災体制の構築	防災体制の構築
地域振興	水産業の振興	漁業協同組合再建
	農業の振興	土地利用型農業の振興
	観光の振興	観光資源の整備
	芸術文化の振興	地域文化としての活性化と保存

# 義援金収支状況（1995年9月末現在）

収入／支出	分類	項目	金額（千円）	
収入内訳		募集委員会（日赤）からの配分	13,284,135	
		北海道からの配分	2,178,400	
		奥尻町の受付分	3,585,201	
		収入計	19,047,736	
支出内訳	被災者配分額	人的被害見舞金	629,100	
		住家被害見舞金	2,042,500	
		農業，漁業，商工業被害見舞金	1,337,100	
		小計	4,008,700	
	災害復旧・防災対策等支出費	被災者救援物資等購入費	19,553	
		犠牲者一周年追悼式典費	20,500	
		復興チャリティーショー負担金	4,000	
		地域防災計画作成事業委託費	10,317	
		観音山壁画設置負担金	19,296	
		生涯学習センター設計委託費	34,608	
		被災地区造成事業公共用地購入費	461,749	
		各学校へ	26,880	
		各幼稚園へ	163	
		小計	597,066	
	復興基金積立額	小計	13,320,789	
	その他基金積立額	後継者人材育成基金	1,000,000	
		北海道南西沖地震育英基金	50,000	
		北海道南西沖地震奨学資金基金	50,000	
		小計	1,100,000	
	支出予定額	被災者配分見舞金及び災害復旧・防災対策（今後の追加発止分）	19,932	
		復興基金予定額	1,249	
		小計	21,181	
			支出計	19,047,736

## 義援金の配分

- 死亡・行方不明：300万
- 重傷：50万
- 中傷：30万
- 軽傷：10万
- 全壊：400万
- 半壊：150万
- 一部損壊：30万

# 地域住民の活動

- 「奥尻の復興を考える会」：青苗地区住民による既存組織が災害後に変化し結成
  - 住民の意見をとりとまとめ、行政との交渉役を果たす。
  - 特に生活再建支援の獲得に関し、住民運動の高まりが見られた
  - 「火災保険金を請求する会」：青苗地区の住民を原告とし、損害保険会社に火災保険の支払いを求める
  - 地震保険の説明の有無が問われ、「説明があれば加入した」と原告が主張
  - 損保会社は連日地震保険についてCMを流す
- 最高裁で敗訴したものの、損保会社が全国の火災保険加入者で地震保険未加入の全世帯に地震保険加入の案内を郵送した

# 北海道南西沖地震復興宣言

1993年7月12日午後10時17分、奥尻島民にとっては永遠に忘れることのできない日となった。

自然の恵みにつつまれた平穏な島のたたずまいが大地の鳴動とともに一瞬にして廃虚と化したあの日、あの時の悪夢を…。

焦燥と悲慘さにあえぎ、さながら“瓦礫のマチ”をさすらった島民が、その再起、再生の悲願に燃え、立ち上がったのは全国から差しのべられた救援のあたたかい手のぬくもりであり、島民にとっては決して忘れることのない人間の愛の尊さだった。

人は苦しみ、悲しみを時として忘却の彼方に追いやる。しかし、家族や友人など198名の尊い人命を失った冷厳な事実を、私たち生きながらえた島民は、長く後世に語り継ぐ責務がある。

私たち島民は、あの辛さ、苦しみに耐え、希望と勇気を今、21世紀の新しいスタートに向け、未来「奥尻創造」の大いなる理想に英知と総力を結集することを誓い、ここに完全復興を宣言する。

平成10年3月17日  
奥尻町長 越森幸夫



# 奥尻島の復興過程①

時期区分	関連する出来事	被災者の居場所	現象
1993年 7月12日	22:17 北海道南西沖地震発生 救援・救助活動	避難所	不安・恐怖・衝撃
翌日			(ユートピア)
15日後	仮設住宅の入居開始	仮設住宅	
1ヶ月後	復興（まちづくり）計画が 出され始める		住宅再建をめぐる地 域住民の思いのすれ 違い
約50日後	行方不明者捜索の打ち切り		
2ヶ月後	合同慰霊祭	恒久住宅	
1周年	洋上慰霊祭		
2周年	2周年追悼式 住宅建設ラッシュ 崩落した斜面に壁画完成		
3周年	3周年追悼式 防潮堤の建設終了		防潮堤により海が見 えなくなる

## 奥尻島の復興過程②

時期区分	関連する出来事	現象
4周年	地域ごとの慰霊碑建立 4周年記念行事	慰霊碑の周囲で地域遺族会ごとの法要が行われるようになる
5周年	町長による「復興宣言」 5周年記念行事	「災害を乗り越えた」という観光イメージ戦略と、被災者感情との乖離
6周年	7回忌法要（仏教行事） 住民有志によるキャンドル点灯始まる （毎年7月12日） 慰霊モニュメントの完成	
7周年	津波館完成	
10周年	10周年記念式典（奥尻町による最後の式典）	津波災害への不安が高まる
12周年	13回忌法要（遺族会連合会）	
15周年	15周年行事（町主導）	災害に触れない観光戦略が本格化
16周年	17回忌法要（遺族会連合会）	地元紙でメモリアル報道がされなくなる

# 被災3ヶ月後の青苗地区



1993年10月9日撮影 定池家所蔵

# 災害から10年後の青苗地区



2003年10月 定池撮影

# 現在の青苗地区



撮影日：2010年7月13日

# 防潮堤





# 人工地盤 (青苗港)











避難階段

# 復興公営住宅

- 2階建て
- 現在は若い世帯も入居している→人口分布が変化



# 復興事業終了後の奥尻町

## ○奥尻町をめぐる状況

- ・切り崩し型の復興基金：H19年で運用終了
- 復興事業で建設した施設のメンテナンス費用が不足
- ・建設業の停滞→若者の島外流出，業者の淘汰，多角経営化
- ・不況そのものに加え，フェリー・航空機の減便による観光客数の減少
- ・1993年当時の人口約4,300人→2011年3月末3,160人

# ○被災者の生活再建状況 (旧青苗5区住民を中心に)

- ・ 日本海中部地震（1983年）に続いて、2度目の被災にあたる住民が多数
- 住宅や漁船・漁具の**2重負債**
- ・ 防災集団移転促進事業の対象となる
- ・ 「70代でも自力再建が可能」（役場担当者）な**手厚い援助**
- 住宅、漁業の再建が可能になったため、人口流出が食い止められた側面

「家も船もすべて失ったので、漁師をやめて島を出ようと思ったが、船が新造できると聞いて思いとどまった。島を離れ、子どもの世話になっていたら、知っている人もなく、仕事をすることもできなかった。支援してもらえたから島に住み続けることができ、80代まで漁師を続けることができた」（旧青苗5区住民のMさん）

# 奥尻島の復興を振り返って

復興はしたさ。  
けど、なんも良くなっていない

- 奥尻の行政・住民にとっての「復興」  
= 家を再建すること, 漁船を再建すること,  
商業を再開すること

「復興」の先には何が・・・？

## 奥尻町の復興

- 奥尻町の「復興」 = 家・漁船の再建,  
商業の再開
  - ・復興は完了したと見なされているが、復興に関する検証はされていない
- 北海道南西沖地震とはいかなる災害だったのか、それに対しどのように復興に向かってきたのか、という「経験の定位」が行われていない



# 奥尻町における災害伝承の手段

- ①看板
- ②展示施設
- ③慰霊碑
- ③'慰霊のための場所・もの
- ④追悼行事
- ⑤避難訓練

# ①看板



11.7 m  
南西沖地震 津波の高さ  
平成5年7月12日 午後10時17分





11.7 m

南西沖地震

平成5年7月12日

津波の高さ

午後10時17分



## ②展示施設—奥尻島津波館

### 〈施設概要〉

- ・ 場所：北海道奥尻町青苗地区（旧5区）
- ・ 平成12年10月完成。翌13年5月オープン
- ・ 町営、奥尻町教育委員会の管轄
- ・ 展示品：オブジェ、作文・詩、映像、遺跡出土品、写真パネル（後から設置）



津波館外観（2008年8月撮影）

# 奥尻島津波館

## 〈特徴〉

- 一般町民の日常的な利用はほとんどなく、主な来館者は観光客であり、およそ40分ですべて見終わるという想定で、観光コースに組み込まれている
- 隣接している慰霊碑とともに、犠牲者追悼を意識した施設



慰霊モニュメント「時空翔」





# 津波を伝える唯一のモノ資料



- 工事の標柱
- 日本海を漂っていたところを発見，奥尻町へ。

# 奥尻島津波館

## 〈伝承機能・語り部について〉

- 計画段階では、「津波資料館」として、北海道南西沖地震に関する資料収集が検討されていたが、被災者感情に配慮するなどの理由から、見送られた経緯がある。
- 奥尻町では「語り部」が育っておらず、現在のところ、津波館を利用した語り継ぎ活動は行われていない。
- 今後は、語り部の育成に取り組みたい（教育委員会）という話であるが、具体的な方策は行われていない。

# ③慰靈碑



2010年7月11日撮影

### ③ '慰霊のための場所, もの



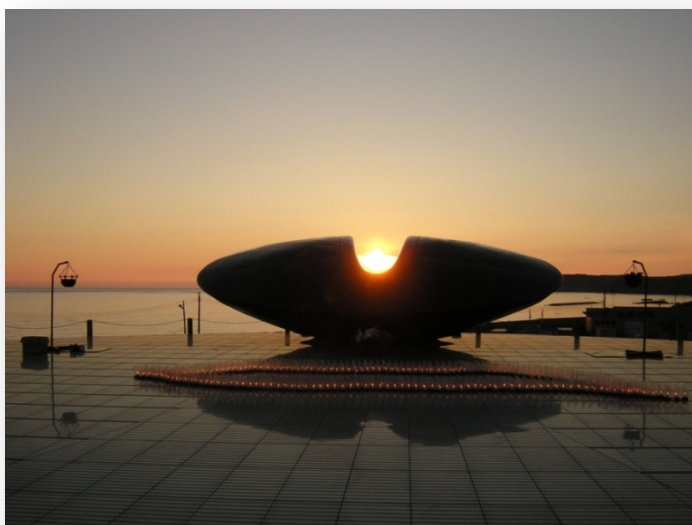


# 慰霊碑・看板・展示施設

追悼の場としての機能



犠牲者の名前が刻まれた  
各地区に建立された慰霊碑



町全体の慰霊碑「時空翔」



津波館



津波の高さを伝える看板

継承の場としての機能

## ④追悼行事



行政



遺族会連合会



地区遺族会



住民有志

## ⑤ 避難訓練









ばんきょうがんばる2年生!

元気もりもり2年生!

みんなともだちやさしい2年生!

ジャンプ

$1\text{ dl} = 100\text{ ml}$   
 $1\text{ l} = 1000\text{ ml}$   
 $10\text{ dl} = 1\text{ l}$   
 $23\text{ dl} = 2\text{ l } 3\text{ dl}$   
 $35\text{ dl} = 3\text{ l } 5\text{ dl}$



運動のあそび  
きだえん子  
あそび  
あそび

べんきょうがんばる2年生!

元気もりもり2年生!

みんなともだちやさしい2年生!



$1l = 10dl$   
 $1l = 1000ml$   
 $10dl \Rightarrow 1l$   
 $23dl \Rightarrow 2l, 3dl$   
 $35dl \Rightarrow 3l, 5dl$

Student in a plaid shirt standing and holding a white hard hat.

Student in a yellow shirt kneeling on the floor with a white hard hat.

Student in a black shirt standing and holding a white hard hat.

Student in a purple shirt kneeling on the floor with a white hard hat.

Student in a black shirt standing and holding a white hard hat.





## 奥尻町における災害文化の伝承

- 地震 = 津波という知識，行動規範は，10年目を境に潜在化
- 災害遺構を残さなかったことが，潜在化をすすめる要因になった可能性も
- 犠牲者の追悼をするが，積極的な伝承はしていない→心理的な回復を待つ必要
- 東日本大震災以降，島外からは，災害対応や復興についての問い合わせが増加
- 視察や修学旅行なども急増

ありがとうございました！

